第75回

話題提供者：石橋　弘之
演　　題：自己探求と社会実践の現場学―所沢・狭山丘陵・武蔵野台地のフィールドから
開 催 日 時：2024年1月17日，17：00～17：45
開 催 方 法：Zoomによるオンライン開催

はじめに

自己の関心を深める探求と、社会から求められる活動はいかにして結びつくのか。この問いは、人と森との関わりをテーマにして地域の歴史と現状を理解する地域研究とともに、課題解決に向けて現場の人と協働する実践的研究にとりくんできた私の経験から生まれた。本報告では、学問と実践をつなぐ研究にとりくんできた私自身の経験を振り返るとともに、大学の教育研究と地域活動の現場をつなぐとりくみが具体化した経緯を紹介する。課題解決に向けて社会と連携するアクションリサーチや超学際研究の現場で何が起きているのかを私のフィールドワークの経験から紹介したい。

カンボジアの森をめぐる移動と交流の歴史

2007年から2013年にかけて、カンボジア西方のタイと国境を接するカルダモン山脈でフィールドワークを実施した。国境の森に暮らす人は近代から現代をどう生きたのかに関心をもち、昔の写真や地図を提示して現地の人に話を聞いた。調査の知見を現地の人と共有するなかで偶然にも写真の人物の子孫と出会った。そして現地で会った人々からお互いに会って話をしたいと相談を受け、地元の人や先住民運動活動家、NGO、行政など多様な主体を仲介するようになった。初めての経験だったので「現場の動きに巻き込まれている」という気持ちもあった。そんなとき、NGOの方が「あなたの研究はアクションリサーチになるよ!」と声をかけてくれたことが実践とのつながりを意識するきっかけになった。その結果、それまで別々に行われていた先住民運動と森林保全活動を橋渡す形で、ダム開発が進む村でワークショップを開催し、さらには森の地図をつくる活動も派生した。その過程で現地の人たちは、祖先がカルダモンを生産して交流した歴史と現在世代が先住民の権利を求めて交流する現状をふまえて地域の歴史を再発見した。

びわ湖流域の上流の森と流域の環境をつなぐ交流の場づくり

2018年1月から2020年3月にかけて、総合地球環境学研究所（地球研）のプロジェクト「生物多様性が駆動する栄養循環と流域圏社会―生態系システムの健全性」(2015年開始、2019年度終了）に参加して、びわ湖流域でフィールドワークを実施した。そして、流域の環境問題と地域の課題をともに解決するために、アクションリサーチを通して研究者が社会と連携する超学際研究にとりくんだ（脇田ら2020)。このプロジェクトで私は流域の人々が上流の森林保全に関わるしくみに向けた研究を担当した。現場を訪れると、私が考えていた研究計画を二歩も三歩も先を行く形で、現場の人は様々な企画を実行していた。インタビューをお願いした方から「一緒に活動する仲間として参加してほしい！」と言っていただいたことは印象に残っている。そこで、地域活動にスタッフとして参加する、上流と下流の交流イベントを運営する、地域活動を情報発信する(SNS記事作成や動画制作）など、現場の活動に参加して地域への理解を深めてきた。

学問と実践を繋ぐ経験を振り返る

地球研では学問と実践をつなぐ経験を振り返る機会もあった。2019年度の地球研オープンハウスの企画「10才の君へ～本から見つける新しい世界～」に参加したことがその機会となった。「10才のときの自分に紹介したい本」「自分の世界を広げてくれた本」を「10才の子どもに魂を込めて紹介」するビブリオバトルの企画であり、地球研で様々な仕事をして働く人々が多岐にわたる本を紹介した。この企画に参加した方と、本について話をしていたとき「石橋さんの学問とどんな関係があるのですか」と問いかけていただいた。「「10才の君へ」で紹介した本と、いまとりくんでいることは、どうつながっているのですか」という問いかけと受けとめ「はっ」とした。「仕事のなかで関心をもちとりくむことと、暮らしや人生のなかで関心をもってきたことが、必ずしもつながっていないのではないか」と思ったからである。

なぜ、こう思ったのか。カンボジアでのフィールドワークは、現地に暮らす人たちの生き方への学問的関心が最初にあった。それが、現地で出会った人と交流する過程で実践的研究が展開した。その経験をいかして、びわ湖流域でのフィールドワークでは、課題解決に向けて社会と連携する超学際研究を仕事とするようになった。つまり、「もともと関心をもっていたこと」と、「いまとりくむこと」との間にギャップがあるように感じたのだ。

そして、「学問って何だろう」「超学際って何だろう」と自問した。「学問」という言葉を文字通り受けとるならば、「学ぶこと」は「問うこと」だ。問いを立てることから学びはじまり、問いに応えようとするなかで学びを深めるからだ。では、超学際は課題解決のための方法なのか、研究者が現場と関わる姿勢なのか。この問いについてより深く考える助けとなる考え方に出会った。それは超学際性を *a way of being*〈存在のあり方〉、すなわち、研究者の専門の枠を超えた個人の生き方として受けとめること、研究者も変わることで社会全体の変容をめざすという考え方である（Rigolot 2020）。この考えにふれて「研究者は専門家である前にひとりの人間である」と思った。その意味で、自己のあり方が問われるともいえる。

では、「わたし」とは何だろう。「わたし」をつくるのは他者との交流だ。「わたし」という存在は、出会った人や歩いた場所、見たこと、聞いたこと、話したこと、感じたこと、ふれたものや食べたもの、そして読んだもの、それらの総体であり、ゆっくり、絶えず移り変わるものと考えるからだ。そもそも、こう考えるようになったのは人生のどん底で生き方に迷っていたころ、次の一節に出合ったことが原点にある。

わたくしといふ現象は
仮定された有機交流電燈の
ひとつの青い照明です
『心象スケッチ　春と修羅』「序」（宮沢賢治）

そのとき以来、この一節が意識の深いところにあり、長い時間をかけて表に出てきたのだと思う。こうして考えをめぐらしていくうちに、自己の関心や社会の活動は、ほんとうにつながっていないのか、むしろ、仕事と生活と人生が交差する現場から学びのあり方を考えることはできないかと思うようになった。

生き方・暮らし方・働き方が交差する学びの場づくり

課題解決に向けて多様な主体が協働する実践が求められる一方、大卒の人もそうでない人も生涯をかけて学ぶ時代に私たちは生きている。では、自己の関心を深める探求と、社会から求められる活動をつなぎ、生き方・暮らし方・働き方が交差する現場から学びの場をいかにして実現できるか。この問題意識から「自己探求と社会実践の現場学―所沢・狭山丘陵・武蔵野台地のフィールドから」というテーマが生まれた。そして、2021年４月から2024年１月現在までキャンパスがある所沢で暮らし、働き、出会った人と交流するなかで、大学の教育研究と里山や生協の地域活動をつなぐ実践が具体化した。

大学で働くこと

早稲田大学では人間科学部の授業「NPO ／ NGO論」を担当してきた。NPOやボランティアの悩み、やりがいを学ぶこの科目の担当をはじめた頃、これまでに私が専門としてきたことから遠い分野だと正直に思った。素人の立場から学びなおす「脱専門の素人学」の気持ちでとりくんだ。ボランティアの学びについて知るうちに、ボランティアは「誰もができること」「意識なくてもやっていること」と思うようになった。そして、自分の経験を振り返り、出会った人の活動や日常の些細なことなど現場で見聞きしたことを授業で紹介した。さらに、「現場の人の声を聞こう！」という意識で受講できるよう、学外の方に話題提供していただく「難民支援とボランティア（宗田勝也さん）」、「狭山丘陵の市民活動（荻野豊さん）」のテーマを設けた。答えやすい身近な「問い」、行動のきっかけになる実践的な「問い」を提示し、学生たちが「自分たちにできることは何か」を話し合う場を設けることで、学生と教員と現場の人が互いの経験と関心を振り返り、学びのプロセスを共有できるようにした。では、教員の役割は何だろう。人生を旅にたとえると、教員の役割は学ぼうとする人が歩く「道」をガイドする案内人と言えるかもしれない。その人が何を学びたいかに気づくきっかけをつくり、講義で話すことと学生の経験はどこで結びつくかを意識するようにしている。

里山を歩くこと

私は小手指に住み、所沢キャンパスのある狭山丘陵まで歩いて通っている。「トトロの森」との出会い。それは、2021年４月に大学で働きはじめて間もない頃。キャンパス正門のバス停となりの森に何があるのか気になって散策したさいに、そこはトトロの森だと知った。同じ頃、所沢市の図書館で『トトロの森をつくる』という1冊の本と出会い、狭山丘陵の自然を守る活動がキャンパス建設と深い関わりがあることを知った。2021年10月にはトトロの森のボランティアに登録して里山整備の活動に参加をはじめた。その後の縁もあって、「NPO ／ NGO論」の授業でトトロのふるさと基金の荻野豊さんに「狭山丘陵の市民活動」について話題提供して頂いた。トトロの森の「はじまり」には、狭山丘陵の開発と保全をめぐる運動の歴史が背景にある。都市近郊の立地にある狭山丘陵は、バブル経済の中で土地売買が進む時代に早稲田大学進出を受けて反対運動が起きた。キャンパスの計画区域は変更されたが、その周辺では建設残土の処分場や墓地計画が拡がった。開発から自然を守るために寄付金で土地を買い取るナショナルトラスト運動の中からトトロの森は誕生した。当時の状況を振り返ると「もし早稲田大学の進出がなかったら、あの場所はゴミの最終処分場になっていたかもしれない」という。

キャンパス建設により破壊された自然もあれば、市民活動により計画区域が変更されて守られた自然もある。この歴史をふまえ、トトロの森を「都市のコモンズ」として育むことをめざしている。そのためにはトトロの森が「いま」直面する課題――ナラ枯れによる生態系の急変、森の管理の担い手、多様な主体との連携、資金の調達と運用――に向き合う必要がある。森の保全を続けるためにできることは何かが問われている。

生協で活動すること

生協をはじめとする協同組合のしくみは、組合員が加入する組織の「出資」「利用」「運営」を担うことを基本とする。協同組合に私がかかわるようになったきっかけは二つある。

第一は「雇われない働き方」を知ったことである。2019年３月、びわ湖上流域のフィールドで『Workers被災地に起つ』(監督 森康行，2018年）という映画の上映会に参加した。働く人が「出資」「経営」「労働」を担う「協同労働」をテーマに、東北被災地を生きる人々の仕事起こしを記録した映画であり、株式会社であれば株主が出資したお金で、経営者が労働者を雇う働き方とは異なる。この映画の上映会を職場（地球研コモンズ研究会）や授業（早大「NPO ／ NGO論」）でも開催してきた。そして、経済成長を最優先しない社会のあり方や、大学卒業後の自分はどうありたいかを参加者に話し合ってもらった。日本の協同労働は、失業者が仕事づくりからはじめた「ワーカーズコープ」と生活クラブ生協の主婦や女性がはじめた「ワーカーズコレクティブ」という二つの流れがある。いずれも協同労働を理念とする点で共通しており、非営利を目的に暮らしや地域のニーズに応えて社会課題の解決に向けた事業を展開している。

第二は、「店づくり」と「まちづくり」をつなぐ活動への参加である。生活クラブは、食の安心を大事にして国産・無添加・減農薬の食材を扱ってきた。そして、食材の購入形態を配送から店舗へと展開している。そこにはライフスタイルの多様化が背景にある。夫婦共働きや子育て世帯、単身や高齢者の一人暮らしの世帯が広がるなかで、「働く人が参加しやすい共同購入の仕組みやルールを整備していく」(生活クラブ埼玉第６次中期計画2015 ～ 2019年度）ために、生活クラブの店舗「デポー」が設立された。そして、デポー店舗での日常業務をワーカーズコレクティブが担当している。

2021年５月、デポー所沢開店のチラシを自宅のポストで見つけた私は、組合員に加入することにした。大学の授業で協同組合のことを扱っていながら、実際の運営のことは知らなかったので「この機会に組合員になってみよう」と思ったからである。2021年７月にはデポー所沢支部の設立大会が開催され、そこにも参加してみた。大会が終わる頃に突如、「支部運営委員を募集します。立候補する方はいませんか」と呼びかけがあった。誰も手を挙げる人はいなかった。すると、「そこの方どうですか」と聞かれ、続けて「この方を推薦します」と声がかかり、支部運営委員を担当することになった。約1年後の2022年５月、デポー所沢支部運営委員のメンバーと集まり、生協やボランティアとの関わり、お互いの出会いについて話を聞く場を設けた。すると、きっかけは人によりさまざまだが、自分が何か気になっていること、その根っこにあるものが響き合い、偶然に出会った人が集まり、今があるということがわかった。

おわりに

今でこそ大学でボランティアの授業を担当するようになったものの、大学生のころの私はボランティアやNPOの経験はほとんどなかった。そんな私が人生の道半ばで出会った人と交流してきたエピソードを紹介してきた。偶然に出会うことの不思議さ。それは誰かとの出会い、どこかの場所、あるいは何かの作品との出会いかもしれない。偶然の出会いは、日常のなかに驚きを生みだし人生を豊かにする。そして、自己をみつめなおし、他者とかかわることにつながる。それは、ばらばらになった世界のなかに、つながりをつくるきっかけになる。

「あなた」にとっての「自己探求と社会実践の現場学」とは、どのようなものだろうか。生き方・暮らし方・働き方がつながる瞬間を実感したこと。偶然の出会いが生活・仕事・人生の転機になったこと。自分の関心と他の人の関心が、共通していると実感したことなど、この報告を読んだ皆さんが思いをめぐらす機会になれば幸いである。

参考文献

公益財団法人トトロのふるさと基金（2020）トトロの森をつくる：トトロのふるさと基金のあゆみ 30年，合同出版.

生活クラブ生活協同組合（2023）第49回　通常総代会議案書，生活クラブ生活協同組合（埼玉）.

地球研オープンハウス「10才の君へ 本から見つける新しい世界（ビブリオバトル）」企画冊子編集委員会：石橋・大谷・熊澤・真貝・原口・地球研広報室（2020）ちきゅうけんリレー選書冊子 ぼくたちを連れ出す 気ままなコンパス，総合地球環境学研究所広報室.

脇田健一・谷内茂雄・奥田昇編（2020）流域ガバナンス：地域の「しあわせ」と流域の「健全性」，京都大学学術出版会.

Rigolot, Cyrille (2020) Transdisciplinarity as a discipline and a way of being: complementarities and creative tensions, *Humanities and Social Sciences Communications,* 7, 100.